

# 「花帽子」を読む

深 萱 和 男

「花帽子―坂本しのぶちゃんのこと」は、石牟礼道子の文と、W・ユージン・スミス、アイリーンM・スミスの写真とから成る全三十一頁の小冊子で、一九七三年四月十日、創樹社から刊行されている。<sup>(註1)</sup>

その小冊子の銀色の表紙中央に坂本しのぶちゃんの全身像が黒々と浮かび出ている。水俣病患者特有の硬直した手の指。右手は垂れたまま掌を内側に向け、左手は、セーターの上につけたゼッケン風のシャツ?―それはかたびらのようでもある―に書かれた横文字を指さすように折れ曲がっている。△LET'S/RAISE OUR/VOICES FOR THE/TURE OF/CHISSO MANKIN../MINAMATA/... SEAS../ICTIM> 右ななめ前方を上目づかいに見る目、その視線を支えるように上体がややねじれ、体のねじれが横文字をゆがんで見せる。この写真は、本文二十五頁にも載っているが、こちらの方は、隣りに母親のふじえさんがハンカチで目頭を押さえながら立っており、そのうしろに何人かの見送りらしい人々の姿も写っている。

これは、一九七二年六月、ストックホルムで開かれた国連人間環境会議に公害被害者代表団の一員として坂本さん母子が出発する時の写真である。△...SEAS...>△DISEASE>||△EASE>を欠

く。△EASE>||楽、苦痛・苦勞・束縛などのないこと。困難のないこと。苦痛・苦勞などの軽減。△DISEASE>||病。病弊。△ICTIM>△VICTIM>||犠牲。神に供えるいけにえ。殺される人。苦しめられる人。災害・病気で死にまたは苦しむ人。被害者、遭難者、受難者。AN A-BOMB VICTIM||原爆被害者<sup>(註2)</sup>。ボナンザグラムのようなゼッケンの横文字の見えない部分を推理し、一語一語の意味を確かめてみる。「殺される人」「苦しめられる人」そして「受難者」。まことに坂本しのぶちゃんは、そのような人としてこの世に生を享けたのであった。

坂本しのぶ。一九五六年七月二十日、水俣市に生まれる。胎児性水俣病患者。彼女の三歳上の姉まゆみも、同じ水俣病が原因で、しのぶの生まれた翌年一月、短い命を終えた。

「灯の暗くなった湯堂、赤ちゃんの時に胎児性水俣病で死んだまゆみ姉ちゃんの話をおたちから聞き、大きくなって、這うてされきよった自分を守り、守りてくれたじいちゃんを思い、肉親の水俣病と、次々に死んでゆく湯堂の家々のこと、つまりだんだんと死んでゆく湯堂の姿を、太陽だけは南の国の日がさす縁側で、彼女はじっと見ているのである。」

「花帽子」の一節にこう書きつけた作者石牟礼道子は、後に、こ

の作品について次のように記している。

「ここに、死んだ海の美しいほとりに一人の少女がいて、その深い悲しみのひとみが、人間の優しさのなぞとして、陽の光とはまた違う光で、わたしたちのほうにまたたいしているお話を書きました。<sup>(注)</sup>」

「花帽子」刊行当時、しのぶちゃんは十六歳、できるだけ多くの若者たちにこの物語を読んでほしいという願いをこめて書いたとも作者は語っている。「中学校現代の国語新版」はこの「花帽子」を教材化している。<sup>(主語)</sup>教材化の意図の源は、作者と同じく、一人でも多くの中学生にこの作品を読ませたいという願いがあった。原典を、およそ二分の一に圧縮し再構成した教材「花帽子」は、これはこれで一つの自立した作品として読むことができる。ここでは、この教材「花帽子」をテキストとして、以下、私なりの読みを記す。

「このごろのボラどもは、ぜいたくになって、どもこもならん。」

物語は、しのぶちゃんの母親ふじえさんのことばから始まる。「このごろのボラども」と言うからには、「昔の(あんころの)ボラども」との対比が前提とされているはずで、物語の前半部では、ふじえさんの会話を中心に、この土地「湯草」の過去と現在の変わりようが語られる。しかし、この最初の部分でふじえさんは、ぜいたくになった「このごろのボラども」を非難しているのではない。彼らを非難するというよりも、むしろそれらの魚たちに対する愛情のよくなもの、あるいは、海や魚どもがこのようにも変わってしまったこと(変えられてしまったこと)に対する慨嘆を、いくらかユーモラスな響きをこめて表しているのである。「しのぶちゃんのお母

さんのふじえさんは、そう言っておほんと笑うのだ。」と、作者はそのときのふじえさんの様子を写している。「おほん」という笑いの、どこか天に抜けるような明るさ、健康さ。それは、昔に変わる今の姿をたしなめるような笑いでもある。

「あんころに比ぶればもう、人間が、魚どもにぜいたく癖つけてしもうたもん。漁師の衆のやることは、魚つりじゃいよ、魚養いじゃいよ、いっちょもわからん。」

このすぐ後に語られるように、ふじえさんは、山のほうの村から湯堂に嫁に来て、「魚たちにごちそうを作って(それも親兄弟でもお互いに秘密の最上の)海の底に沈めに行く暮らしというものを知った。」そのような「あんころ」のどれほど「神秘的かつ牧歌的」であったか知れない暮らしに比べて、今の人間どもの、何というだらしなさ、過保護ぶり。あきれてものも言えぬといった調子でふじえさんは笑い飛ばす。

「魚つりじゃいよ、魚養いじゃいよ、いっちょもわからん。」というふじえさんの口調がそのまま作者にのりうつって、作者が同じことばを繰り返しかけたので、「そこらじゅうにいた者たち」みんなが笑ってしまう。「全くみんなもそう思っているのだから。」と、作者は一種の倒置法でその場の空気を説明する。この倒置法(あるいは省略法)が「花帽子」には多用されているのだが、倒置文(あるいは省略文)の背後から作者の無言の感慨が漏れ出ている気配でもある。「花帽子」に限らず、一般に石牟礼道子の文章が、単なる説明や記録ではなく、詩に近い息づかいを感じさせるのも、こうした手法が多く用いられているからであろう。

さて、人間のぜいたくがボラどもをだめにしたとふじえさんは、まるで「ボラ族の族母のよう」に言い放つ。彼女を「族母」と見る作者のまなざしには太古の母系制社会へのはるかな思いが感じられると言つたら言い過ぎだろうか。そのようにも自然と人間とがへだてなく一つの生をいとなみ合えた原初。作者が、女性の歴史の研究に一生を燃やした高群逸枝に深く心を寄せる人であることを想い起こしておこうか。

「族母」ふじえさんのことばが続く。

「なあ。蜂蜜がよからうか、黒砂糖がよからうか、バターじゃチーズじゃちゅうて、病人にやるようなごちそう食わせて。」

ふじえさんの話しぶりはいかにも屈託なさそうだが、しかし、「有機水銀で魚が減つたのだとは彼女らはめつたに言わぬ。」なぜか。「言えば、世の中がおしまひになりそうで、」と作者は書いている。水俣の海も魚も人々も、チソ工場の垂れ流した有機水銀に冒され、その現実生きながらの地獄である。もし「有機水銀で魚が減つたのだ」と言つたとしたら、その生きながらの地獄を彼女たちが認めてしまひ、もはや救ひは全くなくなる、そんな気持ちから「めつたに言わぬ」のである。めつたに言わぬどころか、彼らはやっぱり「秘法のごちそう」を作つて、せつせと魚たちのところへ運ぶのである。「実際、魚たちを昔から養つてきたのだし。」ここにもまた省略的表現が使用される。先程、「魚つりじゃいよ、魚養いじゃいよ、いっちょもわからん」と笑い飛ばしたのであったが、実際、考えてみれば、この漁師たちは魚たちとともに生き栄えてきたのであつて、魚たちを取り尽くすのではなく養つてもきたのだつ

た。「のだし」の後には、たとえば「魚たちのところへごちそうを運ぶのも当然なのだ。」というようなことばが省略されていると見ることが可能だろうけれど、そうした理詰めのことばを補つたとたんに、言外のためいきがかき消されてしまうことも確かではないか。もし、表現の効果ということを言うならば、こうして漏れ出る息にまず触れることが大切ではなからうか。

話はなおふじえさんの語りを基調に、昔の湯堂と今の湯堂との対比を描いてゆく。昔はさまざまな漁獲で家が建つたこと、このごろはもうそんな話を聞くことはあるまいということ、ふじえさんの嫁入つてきたころのこと、そして△エビがし網△の話。

「もうほんなこて、花の咲いとるごたつた。」

△エビがし網△の話は、しのぶちゃんの生まれた時の話の始まりでもあるのだが、ふじえさんの口つきはいっそはなやいで、それが今の海辺の荒廃を浮き立たせもする。

しだれ桜が咲き広がるようにエビの掛かつてくる△エビがし網△を広げる光景を語るこの場面は篇中最も美しい。

「暗い海の底から幾重にも幾重にも、花のように咲き広がつてくる△エビがし網△の幻影が、今も母親の胸の中にある。そしてその網の中に、死んだ彼女の長女まゆみや、しのぶの、生まれた時の姿が、掛かつてくるのである。

△広がる網の中に昔の村の姿がある。死んだ人々のさまざまの姿、這うてされきよつた姿が、花の網の幻影の中に浮かぶ。」

△エビがし網△は今ではもう見られない。だから幻のようなものである。その「幻影」は過去の美しさをとどめるだけではない。そ

それはまた、わが子たちの死や業病につながるまぼろしなのでもあって、しのぶちゃんの母親にとつて、△エビがし綱▽は過去と現在を結びわば二重の幻影なのである。作者はここでではもう、ふじえさんのことばを直接の会話文としては写していない。ふじえさんのことばとその胸の中の思いに作者は身をすり寄せるようにしていわゆる地の文としてそれを綴っている。その作者の姿勢は続く次の条でさわる。

「『あのエビが毒じゃった。エビがまゆみば殺したわけじゃった。しのぶまで……わたしがせつせと食うたけん。ほかの魚は食わずに。美しかったもね。のどのチリンチリンするごてうまかったもね……。』」

そう思う。あれは夢じゃろ、うつつじゃろ。

思えば、今に比べれば、毎日祭りのような海辺ではなかったか。」教材「花帽子」には朗読テープが用意されており、東京演劇アンサンブルの辻由美子氏の熱演が吹き込まれていて、この「チリンチリン」のところが印象的である。その擬音語の残響が、「そう思う。あれは夢じゃろ、うつつじゃろ。」の一行に沈んでゆく。ここは地の文というよりも、その前のしのぶの母親のことばの続きのようにも、そしてまた、作者の深いつぶやきのようにも聞こえてくる。それはまるで御詠歌のようでもある。水俣の土地に住む人々の思いとことばに作者は身を重ね、同化し、胸の中に取り込んだそれらの思いとことばを作者の筆が作品に紡ぎ出す。作者石牟礼道子が現代の語り部と言われるわけもこうした説話的手法によるのであらう。△エビがし綱▽で取れたエビの美しかったことうまかったこ

と、あれがわが子を殺し業病に苦しめるとは、いったいあれは夢であったのか、それともうつつであったのか。

うねりゆれるようなかつての湯堂のにぎわいが語られたあと主人公が登場する。「わたしたちのしのぶ」である。作者はしのぶを「わたしたちの」と言う。この物語を書かした少女に対する親しい愛の気持ちをもめた表現である。それはまた、後に△しのぶの声▽と括弧付きで作者が呼ぶその声の発語者の生の重みを「わたしたち」人皆が受けとめねばならぬとする作者の思いの表れでもある。

「わたしたちのしのぶはしかし、母親の若い時代のような湯堂の夜景を、知るよしもない。」わずかに、時に聞く父の美声に、「昔の海辺の心のようなものを感じることがあっても。」この文の裏には、変わり果てた現実に対する沈黙の怒りのようなものが漂っている。「昔の海辺の心」。「心」というからには、豊漁でにぎわい、毎日が祭りのようにはなやんでいた当時の海辺の景色だけでなく、そこに住む人々の満ち足りていた思いのようなものも含まれているはずである。

かつての夜景に代わって、しのぶの見るのは、「だんだんと死んでゆく湯堂の姿」である。それを、「彼女はじっと見ているのである。」水俣病のせい、彼女の顔はうつむきがちである。しかし、彼女は確かに見ているのである。生まれながらの業病に耐えつつ彼女は、余人の想像以上に奥深く「世の中を見る。」

「しなやかな手つきだけではなく彼女が、紛れなく十六歳の少女でもある。」

かなわぬ手のくぼで猫の子を愛撫するしのぶの手つきに「しなや

か」さを見る作者の優しい目、その同じ目で、しのぶがもう十六歳、紛れもない乙女であることを見、心を打たれるのである。しのぶの姿態について、作者に次のような発言があるので引用しておく。

「それ(チッソとの交渉の時、しのぶが出した誓約書)をさし出す時、彼女の手が反るでしょう、外側に。こんなふうになるでしょう。水俣病の指だけけれど、なにかインドの舞踊の指のようにね。そういう手にはさんで、こうして頭を下げて、お願いします。って、かわいくてかわいくてね。ほんとうに可憐で……。非常に深みのある張りつめていい顔になった。」<sup>(三五)</sup>

ところで、十六歳の少女しのぶは、「大人たちの前では、十六歳か、あるいはもっと幼い者のようにふるまっている。」そして、「大人たちは、彼女がそのように、大人世界につき合ってくれていることに気がつかぬ。」

しのぶは、生まれる時から水俣病に冒され、体も不自由でことばもうまく話せない。周囲の大人たちはそんな彼女をいたわりの気持ちで見ている。そのことをしのぶはよく知っている。十六歳といえど人生についていろいろと考える年ごろ。しのぶも考えている。しかし、しのぶが人生について考え、自分の不幸を苦しんでいるということを、大人たちが知れば、大人たちは、しのぶをいっそうかわいそうに思うだろう。しのぶは、そのこともちゃんと知っている。だから、自分が、病気のせいで年齢よりも幼く、人生についてそんなにまだ思い悩んでいないようなふりをして、大人たちを悲しませないように、また、大人たちを傷つけないように、しのぶは気を遣っている。そのような、しのぶの優しい心に、大人たちは気づかな

かったのである。作者も気づかなかった大人たちの一人であったが、しのぶがアイリーンに語るのを聞き、強く心を動かされる。

「人間とはなんなのであろうか。どこまで、深く生き合うことができるだろうか。やっとほんとうに、やっと今日一日をやり過ぎている私のような者さえ、これはひよっとすると、一日でも長く生き延びて、しなければならぬ仕事というものがあっているのではないかと、これまで決して思ったことのないことを思い始めたのだ。」

「生き合う」という表現には、人と人とが寄り添って互いに生きてゆくという意味と、一人一人の人間が、おのれの生を見つめ、その行く末を見届けるまで生きてゆくという意味とが重なっているように読み取れる。また、今日一日を「やり過ぎ」というのは、時の流れてゆくのをかたわらにやけてながめやるようなひっそりとした生き方で、つまりはようやくの思いでかろうじて一日一日を過ごしているというのであろう。この部分の作者自身を語ることはを外交的謙譲と受け取ってはなるまい。作者は、荒々しい息づかいで世を生き渡るような人ではない。むしろ、生の内側の薄明を声靜かに歌う詩人である。その作者が、しのぶのことを聞いて、あらためて人間とは何かという根深い問いを発しているのである。それまですでに長く水俣病の闘いにかかわってきた作者が、人間の表皮だけを見てきたはずはないのだが、しのぶの哀切なことを聞いて、人間の生と死、そして人間そのものについて、あらためて問い直すことを迫られ、∧しのぶの声∨に魂を動かされて、「しなければならぬ仕事」を自らに重く負わせようとしているのである。

統いてこの作品の中で最も感動的な∧しのぶの声∨が記される。

△しづの声▽と括弧が付けられているのは、それがしづ一人だけのものではなく、もっと多くのしづと同じ患者たちの声でもあることを表している。しづは、「人語の世界から引きはがされ」「符丁のようにしかしやべれぬ自分のことばを、自ら解説づきで話してくれたのである。」水俣病によって言語機能に障害を受け、人間のことばをまともには語れないしづ。「引きはがされた」という表現に、この病の非人間性・暴力性に対する強い憤りの気持ちが表示されている。

「『ここのできる前に……ほんとと独りぼっちやったもん……泣いたよ。』」

アイリーン、不明瞭極まる発語を聞き取ろうとして、しづの顔をさしのぞく。

『で？泣いた。』

『うん。』

会話はしづとアイリーンの間に交わされ、会話の間にはさまる地の文は、二人のやりとりを作者が写しているのである。作者の語り口は、これまでとは違って、戯曲のト書きのような調子で、二人の動きを簡潔にとらえ、短い感想を加える形になっている。

アイリーンに語るしづの姿勢は、「自分の世界に落ち込み落ち込み」するようにつむぎがちであり、その姿勢をふと起こして、アイリーンの前に浮き上がるようにする。そして、後もどりを繰り返すように独り言を反復しながら、

「えーと、大きくなってから歩いたもん。オオテサエキヨッタも

ん。」

「え？オオテ？」

「オオテ、おおて、這うて漣なみだきよったもん。」

というふうに語ってゆく。ただどしい彼女の発語が、しづいに聞き手に伝わってゆく経過が、かたかな・ひらがな・漢字という形で写されている。

やがてアイリーンの問いかけが、しづのまだ人に知られぬ願いに触れた時、「あんね、あんね……」としほり出すようにせつなげに答えるしづの声の衝撃については、私の読みよりも、中学生たちの感想を借りることにしたい。神奈川県大和市立光丘中学校の柿本隆夫先生の授業記録からである。柿本先生は次のように記している。

「授業計画は五と六時間扱い。その四時間目、ついに子供たちは『しづちゃんのことば』に出会った。

『あんね、あんね……

あんね、あ、また、死んで……

また死んで、死んで……

またね、あ、生き、生きてもろう、いや、『テープから流れることばは、まったく異質な世界として子供たちの心深くに沈んで行き、内部から子供たちを強くゆり動かす。心の中で葛藤が始まった。こうして教材の持つ重さと子供たちは対峙したのである。

印象に残ったしづちゃんのことばから、生徒たちは感想をノートにまとめようとする。だが鉛筆はなかなか思い通りには進んでくれない。しづちゃんのことばを聞き、彼女の背負っているものを垣間見ってしまった子供たちには今軽々しいことばを書くこ

とはできない。しのぶのことに匹敵する重さを持つことばを彼らは自分の内側に求める。それは自分の存在の意味をつきつめられる、非常にづらい作業であるはずだ。」

こうして書かれた生徒の感想文。

(1)にんげんみたいに……まるで自分が人間でないようなことばがでてきたことに驚いた。それは、その気持ちは自分には深くわからないけど、また、何も言うことばがないほど心の中がつまった。

(佐藤嘉忠)

(2)あまりはつきりといえないことはをいっしょうけんめいになっていおうとしている。しのぶという十六歳の少女のこえがなにかこわいようにかんじた。なぜだか……

(市川 悟)

(3)もどして欲しいというしのぶちゃんの訴えが一番私には印象に残っている。

私は水俣病を聞いただけで、見たことも経験もしていない。だけど、その聞いただけで水俣の(他の公害病)などのこわさがわかる。

しのぶちゃんがテープで話している時に次のことば一つ一つが他の人(人)に変わって一生けんめいに言っているみたいだ。「もうしてもう、おねえちゃんみたいに……にんげんみたいに……にんげんみたいに……みんなみたいに……。」なんて、まるで自分生きてるのに生物ではないみたいだ。「人間みたいに」と訴えていることが本当に泣いて訴えているようだ。テープだから泣いていないのか泣いているのかはわからないけど、心の中で泣いているようだ。

(大山 栄)

楠本先生は、多くの生徒たちが、「にんげんみたいに」というしのぶのことに心を留めたと述べている。

「そして子供たちは『にんげんみたいに』という、胎児性水俣病患者しのぶの、自己の存在をかけたことばの中に、そのことばの重さが故に、一人一人が沈みこんでいかざるを得なかったのだ。それは逆説的ではあるが、真に人間の存在の意味を問うことばとして子供たちに迫っていったに相違ない。」

授業をふりかえて、このように書き記す楠本先生の記録を読みながら、私はその教室の緊張した空気を肌を感じる。Aしのぶの声Vがこだましてくるようにも思う。それは、「もどして、あ、もらいたい、ああ。」と、アイリーンが、普通の人間になりたいというしのぶの願いを聞きとめたときの感動に近いと言ってもよいかも知れない。

しのぶの魂の叫び声ともいうべきことばを聞いてしまった作者は、詠じ念ずるような調子で最終段落を綴っている。

「花恥ずかしい少女が生についてよりも死について、会うことよりも別れる時のことを、自分の欲する死ではなく、確かな殺意に殺される死について考え抜き、そこからふり返ってみた自他の命の意味を熟知してしまおう。」

水俣病は単なる過失によるものではない。美しく豊かだった自然も、そこに住む人々も、次々に死に絶えてゆく。それを「殺意」による無残な死と作者はとらえる。そこには激しい感情が息づいている。その情念の奥底から「なぜ、自分は、しかしまだ生きてるか……。」という問いが発せられる。しのぶの、死んでもう一度生

きもどしてもらつてあたりまえの健康な体にしてもらいたいという願ひを受けて、作者は、しのぶの立場になりきつて、なぜしかし自分はこんなに苦しみながらなお生きているのか訴えているのである。その訴えの激しさが、作者に「一日でも長く生き延びて、しなければならぬ仕事というものがあるのではないか」と思い知らせたのもあつた。

最後の一行は美しくしめくられる。

「小さい時から花帽子の好きな女の子だった。」

胎児性水俣病によって人並みな少女としてのほなやぎも喜びも奪われてしまつてゐるしのぶなのであるが、それでもなお、「花帽子の好きな女の子」として、彼女自身の生を生き続けているのであつて、そこに、なまじいな同情や哀れみを突き抜けたしのぶの人間としての優しさを作者は感じているのである。

作品を読み終えて、私は、あの中学生と同じように「何も言うことばがない」状態にいる自分を自覚しないわけにはいかない。近ごろの読者論の流行にあきたらず、作品を読むということは具体的にどういうことを実践しようか試みたのだが、今は、次のような拙文を再録することで結びに代えたいと思う。この教材の基本的な学習事項の一つに登場人物の心を読みとることを挙げ、その解説として記したものの一部である。

「この作品は、事件や人物の動きを描いたものではない。その点では、いわゆる小説の範疇には入りにくい作品である。登場人物は、名前だけ出てくる者を除けば、しのぶのほか、しのぶの母、アイリーン、それに私の四人である。時間は、湯堂の昔から現在まで、流れているが、それらはむしろ、人々の心の印画紙に

焼き付けられたまま、どこかで静止した感じである。登場人物たちは、それぞれの印画を、じつと見つめ、ある一点を通して、遠く未来を見ずえているらしい。その一点は、死—作者のことは借りれば、自分の欲する死ではなく、確かな殺意に殺される死—である。その一点を通して、人々は人間の命の意味を深く思い知る。この作品が単なる記録の域を越えて、鋭利な文学になり得ているわけもここにあるのだが、私—作者は、人々のそのまなざしと心を深々とらえている。」

(注一)「花帽子」は、「不知火海—水俣—終りなきたたかい」(石牟礼道子編、一九七三年七月、創樹社刊)の「序章」として、写真とも全文が再録され、「草のことづて」(一九七七年十二月、筑摩書房刊)にも全文が収められている。

(注二)英語の訳語は「岩波英和辞典新版」に拠る。

(注三)「中学校現代の国語」内容見本。(一九七七年、三省堂刊)

(注四)三省堂刊。一九七八年から使用。この教材は三年用である。

(注五)「鼎談—水俣—体験」(前出「不知火海—水俣—終りなきたたかい」所収)

(注六)「中学校現代の国語—三省堂通信No.5」(一九八〇年二月)

なお、この記録で紹介されている生徒の感想を読むと、朗読テープの中で、△しのぶの声▽の部分、しのぶちゃん自身の声と聞いたら生徒がいるようだが、これは朗読者辻氏の声である。真に迫る熱演が生徒たちにそう思わせただけであらう。念のためことわっておく。

(注七)「中学校現代の国語3学習指導書」

(本学総合科学部教授)